

児童文学の旅

石井桃子著



岩波書店

児童文学の旅

石井桃子 著

岩波書店

児童文学の旅

一九八一年三月二七日 第一刷発行 ©

定価一七〇〇円

著 者 石 井 桃 子

発行者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋一五五
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三二六五二四二
振替 東京一六三〇

印刷・製本 法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします

まえがき..... 1

I 出会いの旅 一九五四―五五..... 5

1 旅のはじまり..... 7

2 アメリカ横断..... 11

3 ミラー夫人と『ホーン・ブック』..... 23

4 スミスさんと「少年少女の家」..... 35

5 ニュー・イングランドのクリスマス..... 43

6 赤いペバミント..... 57

II 再会の旅 一九六一..... 63

1 はじめてのジェットの旅..... 65

2 八島太郎さんとの絵本談義..... 70

3 去りゆく開拓者の時代..... 77

4 ミラー夫人との再会..... 83

5 スミス家の夕食会..... 96

	6	トロントの「お話大会」	104
	7	フアージョン訪問	111
Ⅲ イギリス初夏の旅 一九七二			
	1	イギリスへ	121
	2	初夏のキュウ・ガーデン	130
	3	カーネギー・ホールグリーナウェイ・メダル受賞式	136
	4	フアージョンのサセックスへ	146
	5	マーティン・ピピンの野山	159
	6	チャンクトンベリの木の輪	171
	7	サトクリフ訪問	179
	8	歴史の街ルイス	189
	9	アルフリストン一人歩き	202
	10	ポターの日記	216
	11	リンダー氏訪問	231

12	したたかなひと	247
13	子どもの本屋さん	268
IV 想い出を追って 一九七六・一九七九		
1	環太平洋児童文学会議	285
2	ジーンのいない部屋	291
3	想い出の「シーリング」	306
4	アメリカの憂鬱	318
5	「伝説のひと」	328
	付記	343

まえがき

この本のⅠ章の一部、それにⅡ章、Ⅲ章は、私がこれまで外国を旅したあと、ぼつぼつと書いては、主に岩波書店発行の『図書』に発表したものです。今度、一冊の本にするにあたって、すでに活字になっていた部分も重複、説明不足を避けるため、多少の整理、加筆をしました。新しく、Ⅰ章の前半になった部分をつけ加えたのは、一回めの旅のあらすじを添えたほうが、後の章に出てくる海外の友人たちとの関係を、読者の方々によりよくわかっていただけるだろうと考えたからです。また、終りのⅣ章は、この二十数年、心の支えであったリリアン・スミスさんの身辺を語ることによって、彼女のかつてしてきた仕事と、その後の子どものための図書館活動の変遷の片りんを、その生活のなかからお伝えしたかったためでした。

外国旅行とはいっても、私は、いままで、観光旅行というものをしたことがありません。まず最初の旅(第一章)が、ロックフェラー財団の奨学金による、欧米の児童文学、児童図書館活動、出版事情を見学するという、修学旅行的なものでした。これは、一九五四年八月から五五年九月

にかけての、私としては一ばん長い海外生活になりました。しかし、私は、この旅について殆ど何も書きませんでした。それは、財団が寛容にも、報告書というようなものを求めなかったからでもあります。もっと大きな理由は、私が誰に会い、何を見聞きしても、すばやく受入れたものを整理整頓して、「これこれは、こういうわけでこうなるのだ。」というような記事を書くことができないたちの人間だったからです。私は、ただ会い、見聞きして、目のまえにあらわれたものを自分流に感じとるほかなかったのです。あまり多くのところをまわり、あまり多くの人びとに会ったこの旅で、私の頭は舞いあがるほこりに満たされ、それが落ちついて、見聞してきたものをやや透視的にふり返ることができるようになったのは、帰国後二、三年たってからのことでした。二回めからは、自分で自由に出かけた旅でしたから、仕事に関係があったとはいえ、一回めのときにできたたくさんの友だちのあいだを経めぐる結果になりました。

一回めの旅では、旅程のひとつ、香港から羽田までを飛行機でとんだ以外は、船と汽車と車で世界を一周しました(そのころは、多くのひとにとって、遠くの国に出かけるとき、船旅は普通のことであつたのです)。こののろい旅は、その後、私が世界というものを考えるときのよい基盤になりました。そのあとからが、飛行機の旅になりました。二回め(第Ⅱ章)は一九六一年で、アメリカを経てトロントに飛び、その公共図書館の児童部「少年少女の家」での「お話大

会」に出席してから、イギリス、オランダ、スウェーデンへゆきました。三回め(第Ⅳ章)は六七年で、それまでの数年間、西川正身先生の御指導で勉強してきたアメリカの作家、ウィラ・キャザーの作品に出てくる場所を巡礼するという目的もあり、二人の友人とヨーロッパを経て、カナダ、アメリカをまわりました。つぎの七二年のイギリス旅行(第Ⅲ章)については、この本のなかになりにくわしく書いてあります(この旅の帰途、トロントに飛んだのは、病気でたおれた、「少女少女の家」の元部長、ジーン・トムソンさんを見舞うためでしたが、そのことは、「イギリスの旅」とは別に、この本の第Ⅳ章にくみこまれています)。七五年のイギリス、フランスゆきは、ごく私的に、病気の友人をイギリスで見舞ったもので、そのあと、パリ郊外に住む絵本作家の堀内誠一さんを訪ねました。七六年(第Ⅳ章)には、ヴァンクーヴァーのブリティッシュ・コロンビア大学図書館学科主催の「環太平洋児童文学会議」に出席したのち、トロント、ボストン、ニューヨークで旧友に会い、図書館を訪ねました。七九年(第Ⅴ章)には、ある出版社の仕事で、トロントの「少女少女の家」の所蔵する、オズボーン・コレクション(イギリスの児童書の古書コレクション)について調べるために出かけました。これは十日あまりの、私としては一ばんつらかった、強行軍的な旅でした。

これらの旅行のうち、この本のなかで全然触れてなかった部分、または、わりあいくわしく書

いてあるところなどがあって、この本には、大きなむらがあります。それは、帰国後、書く気も
ちになったことは書き、ならなかったことは書かなかったという、わがままな理由によるもので
す。

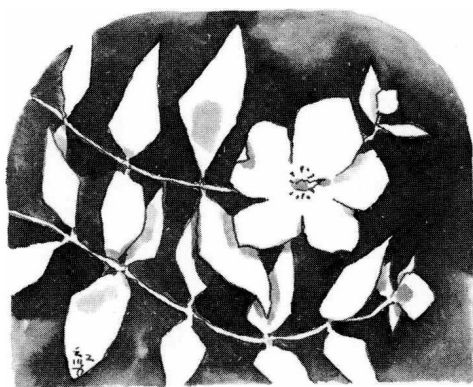
こうした成りたちから、この本のなかで、「時」は綾とりの糸のように入り乱れています。で
きるだけ、前後の関係のわかりやすいよう整理したつもりですが、何分にも古い記憶をたどつて
の仕事でしたので、不分明なところも多いことと、その点、お許しいただきたいと思っています。
雑誌に掲載されたとき、この紀行文を本にするようにとお手紙をくださった方々、また間接に
お言づけをくださった方々に感謝いたします。「児童文学の旅」などというむずかしい題にとら
われず、あるひとりの女の感情的な旅行記として読んでいただきたいと思います。

一九八〇年十二月

石井桃子

I 出 会 い の 旅

一九五四—五五



1 旅のはじまり

はっきりした日時をおぼえていない。けれども、あれは、たぶん、一九五三年の半ばすぎのことであった。そのころ、私は岩波書店で子どもの本を編集していたのだが、ある午後、机の上の電話で、坂西志保さんが私を訪ねてこられたと知らされた。

驚いて受付にとんでいくと、まえに二、三度お会いしたことのある坂西さんが、ぽつんと玄関に立っていらした。そして、坂西さんは、あいさつもそこそこ、玄関につづく廊下に並んでいる応接用の小卓に私と向かいあって掛けると、

「あなた、アメリカへ一年、勉強にいつてみる気ありますか？」
とおっしゃった。

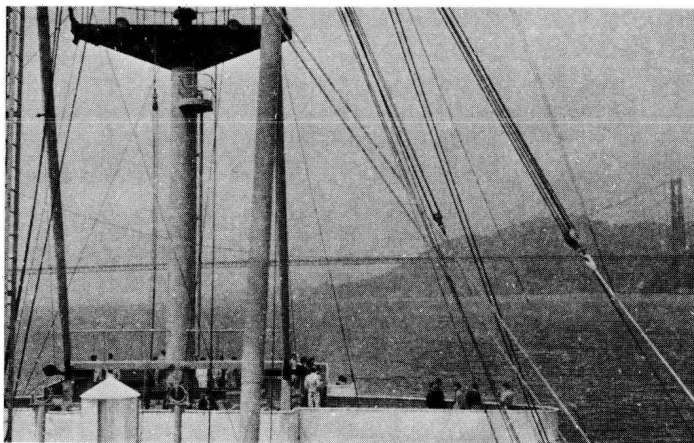
アメリカのロックフェラー財団では、世界じゅうの研究者に奨学金をだして、研究員として国外留学の機会をあたえている。坂西さんは、日本の部の人文関係の選委員をしていらしたのだ。もし私にゆく気があれば、すいせんしてみるというのである。

突然の話だったし、まだそのころ、ひとさまの浄財は遠慮なくいただいていたという考えになれていなかった私は、即座の返事ができなかった。それにもうひとつ、気になったのは、そうした奨学金をうけた場合、こちらに何らかの負い目が生じるのではないかということだった。しかし、そのことを伺うと、坂西さんは、そういうことは全然ない、その勉強をのちの私の仕事に役だてれば、それでいいのだと説明してくださった。私が「考えます。」と答えると、坂西さんは、さっさと帰られた。

それから、私は、自分でもとつおいつ考え、岩波書店のひとにも相談した。書店では、「岩波子どもの本」が前年に創刊され、二集目の発行をひかえて、大いそがしの最中だった。しかし、そのころ、私は、子どもの文学というものについても、自分の編集者としての資格についても疑問を感じはじめ、いつか立ちどまって考えたいと思っていたところであった。そして、結局のところ、そのような疑問をすこしでも解くために、外国の子どもの本の世界を見てこようという気もちになり、その旨、坂西さんに御返事した。

ロックフェラー財団の研究員になるためには、まず、簡単ではあったが、東京での面接審査が必要であった。私が面接したのは、二人のアメリカ人で、ひとりとは、その当時の財団の理事、フーズ博士であった（その後、博士は、財団を退かれ、つぎつぎに他の要職に就かれたが、一九

1-1 旅のはじまり



1954年8月24日、ついに「金門橋」のかなたに、白く輝く崖の都、サン・フランシスコが見えてきた。

八〇年亡くなられるまでじつに二十数年間、私に興味ありそうな本や切りぬきをずっと送ってくださっていた。この審査員たちに私がした、私の日本の児童文学に関する説明は、まことにしどろもどろなものであった。それについて、審査員たちがどんな点をつけたか、私は知らない。しかし、私には見せないで、聖路加病院から直接、財団に送られた健康診断書が、かんばしくないものだったことは、確かなようである。じっさい、そのころ、私は、どのお医者にかかってもはかばかしくない、不快な健康状態をもてあましていたし、聖路加病院の先生方が、私を診ながら英語で話しあうことを、少しは理解することができた。脾臓もどうかしているようだった。鼓膜もどうかしているようだった。

（これは、小さいときした中耳炎の結果にきまっていた）。血液検査をしてくれた若い女のひとは、私の名を知っていて、私の貧血の度に驚いたように、「おだいじにね」といつてくれた。

しかし、そのころの私の毎日は、そのようなことを氣にかけていられないほど忙しいものであったから、何カ月かは、たちまちのうちにたった。そして、やがて、財団からは研究員として受入れ決定の通知がきた。私は、自分を自由にするため、岩波書店をやめ、一九五四年八月十二日、「プレジデント・ウィルソン号」という大きな客船で横浜を立った。

ちょうどおなじ船に、やはりアメリカの旅にたたるアメリカ文学の西川正身先生がいらっしやった。ほとんど無我夢中でたくさん場所をめぐり歩いた一回めのこの旅は、いまとなると、その後の私にとって師となり、友となるひとと会うための旅だったといえなくもない。西川先生には、それから今日までずっと教えをうけていて、先生のもとで数人の友人といっしょに、ウィラ・キャザーをはじめ、アメリカの作家の作品を読むこと二十年余におよんでいる。

2 アメリカ横断

アメリカでの私の勉強のプログラムは、私がまだ岩波書店にいて、おちつきなく暮らしていたころから、ほとんど私には関係もないように、ひとり歩きで進展していた。というのは、私には、太平洋戦争まえから手紙の上だけで知りあっていたバーサ・マホーニー・ミラー夫人という、アメリカの友人がいたからである。夫人のことは、この本のあとの部分に出てくるので、ここでくわしくは書かないが、彼女は、いまでもボストンで出ている、子どもの本の批評誌“*Horn Book Magazine*”の創始者であった。私が、ロックフェラー財団の研究員としてアメリカにゆくことになったと知らせてやると、夫人は、すぐさま、ファーズ博士と連絡をとって、私のために綿密すぎるほどの案をねりはじめた。

いまは亡いミラー夫人が、私に送ってくれた、第一段階のプログラムが、私の手もとに残っている。彼女の入念ぶりを御紹介までに概略を写してみると（カッコ内は、私の説明）、つぎのようなものであった。多少の変更はあったが、大体このような順序でおこなわれた私の最初のアメリカ